

『恋と告げるまで』

著：名倉和希

ill：実相寺紫子

「部長さん、暑くないの？ ネクタイ締めてスーツ着てるけど」

「暑いさ。だがスーツ着用はビジネスマンの常識だ」

暑いと言いながらも、藤代は平然とした涼しい表情だ。

季節は初夏。今日は、六月の梅雨の合間の晴天で、かなり気温が高い。海風が強く、いくら体感温度は低いが、コンクリートの建物とアスファルトの道路に囲まれたコンビニナートー帯は、じっと立っているだけで汗が滲(にじ)んでくる。

透は今朝の天気予報で最高気温をチェックし、いつものごとく非常にカジュアルな服装で来ていた。黒いTシャツの上に鮮やかなイエローのパーカー、ショート丈のデニムパンツからは手入れもしていないのにつるつるの脚が伸びている。足元は当然ながらスニーカーだ。

動きやすくてコンビニナート見学には適しているが、藤代と並んでいると、おそらく保護者と子供のようなだろう。ジャケットでも羽織れば、それなりに年相応に見られるかもしれないとわかっていても、透は暑いのを我慢してまで着る気はない。

「でもさ、服装で仕事するわけじゃないだろ。どんな格好していたって、デキる奴はデキるし、デキない奴はデキないと思うけど」

「それは君たちのような才能を生かすジャンルの者だから言えることだろう。我々のような信用第一の仕事は、やはり身なりは大切だ。自己管理すらできない者が、はたして商品の管理ができるのかと疑われてしまう可能性がある」

「ふーん、そういうものかな……」

「商売にはハッターも必要だからな。仕立てのいいスーツを着れば、多少デキない人物でも、デキるように見えるだろう」

「部長さんはどっち？ いいスーツ着てるけど、デキるの、デキないの？」

意地悪な質問を試してみた。藤代は少し考えて、「場合による」と否定だか肯定かわからない返事をした。

「運に恵まれてすべてがとんとん拍子で行くときは、自分でも少しはデキる男なんじゃないかと思うことがある。だがなにもかもがうまく行かないときは、なんて無能なんだと落ち込むこともある」

「えーっ、部長さんでも落ち込むことがあるんだ」

「人である以上、常にすべてをパーフェクトかそれに近い状態へ持っていくことは不可能だろう。大きな失敗からささいな失敗までさまざまだが、私とて落ち込むさ」

「見かけは鉄人っぽいのにな、結構繊細なんだ」

あははは、と笑いながら揶揄を含んだ言葉を口にした透を、藤代はじっと見つめ、ふっと苦笑した。

「君は思ったことを、すぐ口に出してしまう性格らしいな」

「あー……………怒った？ 気を悪くしたならごめんなさい」

またやらかしたかと、透は藤代の顔色を窺(うかが)う。口は災いの元とはよく言った

もので、透は不用意な発言でクライアントをたびたび怒らせて衝突した。最悪の場合、依頼取り消しにまで発展したことがある。そのたびに川口に迷惑をかけてしまい、透は透なりに毎回猛省するのだが、喉(のど)元(もと)過ぎればなんとやら……同じことを繰り返してしまう。

だが藤代は特に怒った表情ではない。少し困ったように眉尻を下げてただけだ。

「別に怒ってはいないが……」

「俺の評判、聞いているだろ」

「それはまあ、いろいろとね。君との仕事をより円滑に進めるために、必要だと思ったから情報を集めた。それを裏付けるような場面を、先日のパーティーで目の当たりにしたわけだが」

「あー…、そういえばそうだった…。あの時はゴメン。あいだに入ってもらわなかったら大事になっていたかもしれないのに、八つ当たりで思いっきり足を踏んづけちゃって…。痛かったよな」

「私の靴は頑丈にできているのでたいして痛くはなかった」

冗談なのか本気なのかわかりかねる言いまわしだったが、さらりと藤代は流してくれた。

「壇上での挨拶は堂々としていて素晴らしかった。いつもあんなふうにはいかないか？」

「あれはだって、用意しておいた挨拶をしゃべっただけだから。あのくらいのハッターリはかませるようになったよ、さすがに。でもフツ一の会話になったらダメ。ポロが出ちゃうんだよなー。だからいつも社長に迷惑かけてる」

情けないけれど隠してもムダだろうと白状し、透はえへへと苦笑いする。

「社長にはホント、世話になってるから、たくさん仕事して恩返ししないといけないんだ」

「君はわりと義理堅い性格みたいだな」

「義理堅いって……部長さん、表現が古いよ」

透はくすくす笑いながら藤代のまわりを弾んだ足取りでうろちよろする。

ふたりであちこちの現場を見学しはじめてから三日。透はすっかり藤代を気に入っていた。

大企業の経営者一族の出で、生(きつ)粋(すい)のエリートなのに、藤代は気取ったところがなく話しやすい。見かけはがちがちに堅そうだが、そんなことはぜんぜんなかったのだ。

本社の会議室で同行者を藤代にしてほしいと言い出したときは、困らせてやろうという気持ちが大きかった。藤代が透の勢いについてこれなかったら笑ってやろうとも思っていた。

けれど、三日間、行動をともにしてみて、自分の発想の貧困さを反省した。藤代は頭の回転が速く、包容力もあり、紳士だった。さすが天下の藤代商事の社長令息、かつ三十代で部長になった人物である。変に威張ったり、透を軽く見たりもしない。かといって心にもないお世辞を言って持ち上げることもしない。

見学地に向かうときも、透とおなじようにニュートラルな状態で行ってくれる。藤代以上の同行者はいないくらいだ。

一日目は物流センターでトラックの出入りを眺め、農産物の集荷と原料加工メーカ

一への配送を見た。二日目は自動車部品の製造工場へ行ったあと、マンションの建設現場を見学した。

そして今日は石油コンビナートでタンカーとご対面だ。藤代がいっしょになって感心したり疑問を抱いてくれたりするので、透はまるで遠足のように楽しんでいる。

「このあとは発電設備を見に行く予定だが、そろそろ移動してもいいか？」

「うん」

透は藤代のあとについて管理事務所へ向かう。臭いヘルメットをさっさと取り、手でぶらぶら揺らした。

「明日はどこだっけ？」

「航空機関連の施設を考えているが、山陰地方まで足を伸ばすことになる。泊まりがけでもいいと聞いているが」

「いいよー。どこへでも行く。なんなら海を越えてもいいよ」

透が軽く言ったら、藤代が「ふむ」と唸(うな)りながら足を止める。

「本当に海外でもいいのか？」

見下ろしてくる目が真剣なのを見て、透はわくわくしてきた。これはどこの見学を思いついたのだろうか。

「どこに行くの？」

「私も一度行ってみたいと思っていたところがあるんだが……」

「だからどこ？」

もったいぶらずに教えろよ、と短気な透は急かす。

藤代は南の空に目を向け、答えを口にした。

「オーストラリアのクイーンズランド州だ」

本文 p42～47 より抜粋

作品の詳細や最新情報はダリア公式サイト「ダリアカフェ」をご覧ください。

ダリア公式サイト「ダリアカフェ」

<http://www.fwinc.jp/daria/>